



詩人の道筋は、すべて杜甫に行きつく。大暦年間（七六六—七七九）以降、詩の大家として名高い人物は、洩れなく杜甫を學んで大成している<sup>③</sup>と述べており、現代の學者である程千帆もまた「杜甫の『集大成』と孔子の『集大成』とは同じであり、最も重要な意義は、前代の繼承にあるのではなく、その前途を切り開いたことである。『集大成』という概念は、哲學領域から文學領域へと移項すべく、詩の王國における『集大成者』という桂冠は、唐代の人の手にはよらず、ただ宋代の人によってのみ杜甫に捧げられたことの最も主要なる原因はここにある。」と肯定する<sup>④</sup>。しかし現代人が書いた文學史あるいは杜甫の作品研究の著作は、みな前代の繼承・後代への創新性という意義によって杜甫の作品の集大成の意義を認めてはいるが、だが詩歌藝術の角度から、杜甫の作品が後世の人のために門戸を開いたことを具體的に論じたものは少ない。

詩歌作品の歴史という、より高次の觀點から見たときの杜甫の作品の後世の人への影響としては、以下の九項目を重視すべきであろう。

杜甫應酬詩小議（蔣）

(1) 時事を詩に取り込むという記實性（詩による歴史敘述）。

(2) 新樂府の事實に即した名作品。

(3) 長篇の排律・古詩における作品容量の廣がり。

(4) 連作・連章形式の作品における全體の構成。

(5) 長篇作品における章法の追求。

(6) 律詩における沈鬱・斷絶の美。

(7) 家庭内のささいな事柄や日常生活を詩に読み込むこと。

(8) 一般大衆的な人情味。

(9) 應酬詩における、あくまでも節度ある感覺。

これらの問題は、現代の人による論著においては大概すでに深く追求した研究があるが、ただ應酬詩については、まだ注意した人はいないようである。

いわゆる應酬詩とは、廣義に就いて説明すれば、社交時における詩歌制作である。中國古代では、建安時代における公式の宴會・贈答・送別に始まり、詩歌制作はやがて密接に社交と結びつくようになった。しかし唐代以前は、詩

歌作品が大量に散逸しており、すでに現存作品に依據しながら中古の人々が詩歌を用いて社交するときの一般状況を考察するのは甚だ困難である。曹植・陸機・謝靈運・陶淵明・鮑照・沈約・謝朓・庾信のように残っている詩が比較的多い詩人は、その創作の主流はみな樂府・賦得・詠物・記事・言志の類であり、特定の對象者に照準を合わせた實際時の作品数ははなはだ少ない。これは理解に難くなく、門閥社會における身分制度とは、異なる階級どうしの文化交流を制限するものであり、また貴族階級の生活圏はさぶる狭く、日常の生活内容も甚だ近く、ゆえに感情を交流させることへの需要が詩歌創作において育ちゆくことは難しかった。このような状況は初唐にいたっても全く變化はなく、まさに大曆年間になっていた、詩歌の社交の道具としての屬性が顯然として明らかになったと言える。もし大曆年間の詩作品がどのように、前代の作品にくらべて最も明確に區別できる特徴を有するかを説くならば、まず第一に、詩題に大量の人名を含むようになるのは、詩が當時の人の交際時において、とりわけ目立つ位置を占めていたこ

とを暗示する。また、このような傾向の形成過程について振り返ると、杜甫の作品とはおおいに注意すべき先驅的存在であることを發見できよう。當時においては「詩史」と目され、今日では現實を重視し、民衆の苦しみ心寄せたとして盛んに稱せられる杜甫であるが、實はさらにいっそう自己の社會的地位および他者との關係を重視していた。このため、杜甫の詩作品の創作は、他者との應酬に、多くの心力を注ぎ込むものであった。これらの應酬は、傳統的詩學における分類學の視野のなかでは、いくつかの相異なる形式のなかに分散されるため、その同一性は稀薄にして眼に見えず、隠れて顯われずという状態であった。このことは杜甫の日常生活の様子に入れてこそ、始めてその端緒を見出し得るであろう。そのため先ずは、傳統的詩學における應酬詩のいくつかの境界についての定義を引き剝がしてみる必要がある、そこではじめて問題の討論に踏み込めよう。

實際問題として、應酬とは日常生活における不可避にして、人のみな熟知するところの行爲であるが、しかし具體

的に説明するのは必ずしも容易ではなく、概して以心傳心すべくも、言葉では説明しがたいという種の事柄に屬するであろう。應酬詩について言えば更に、どのような内容あるいは形態が應酬であるのかを明確に區分けするのは甚だ困難なわけである。朱庭珍<sup>⑤</sup>『篠園詩話』卷四にはこう述べ

所謂應酬者、或上高位、或投泛交、既無功德可頌、又無交情可言、徒以慕勢希榮、逐利求知、屈意頌揚、違心諛媚、有文無情、多詞少意、心浮而僞、志躁以卑、以及祝壽祝喜、述德感恩、謝饋贈、敘寒暄、征逐酒食、流連讌游、題圖贊像、和韻迭章。諸如此類、豈非詞壇幹進之媒、雅道趨炎之徑。清夜捫心、良知如動、應自忸怩、不待非議及矣。是皆誤於應酬二字者也。則不登應酬之作、所以嚴詩教之防。不濫作應酬之篇、所以立詩人之品、何可少也。<sup>⑥</sup>

——いわゆる應酬作品とは、或いは高官に贈呈し、或いは社交の道具に使うわけであり、もとより稱讚する

杜甫應酬詩小議（蔣）

ような功績・徳望も無く、特別の友情も無いのに、ただ單に勢力を慕って榮華を崇め、利益を追いかけて知遇を得るために、氣持ちを押し曲げて褒め稱え、心に背いて媚びへつらい、文飾には心情が缺けており、言葉は多くても思いが少なく、心は浮わつて僞りに満ち、氣持ちは高揚して卑しく、そして長壽を祝賀し、高德を述べて恩義に感動し、贈り物に感謝し、ご機嫌を伺い、飲食を追い求め、宴會に入りびたり、繪畫に揮毫して肖像畫に贊し、次韻して唱和し合うのである。以上のごときものは、詩壇における自己推薦の道具であり、風雅に名を借りた勢力あるものへの迎合の手段ではないか。靜かな夜に胸に手を當て、良知が發動したならば、自ら内心忸怩として恥じ、他人の非難など要するまでもないだろう。これらはみな「應酬」という二字による誤解である。つまりは應酬作品を詩集に載せないのは、詩の教訓というものの垣根を高くするためであり、むやみに應酬の詩を作らないのは、詩人の品格を確立させるためである。（應酬への忌避は）多

くあつて然るべきである。

ここに説く應酬とは殆ど、物事に心動かされて氣持ちを述べるという以外の大部分の詩歌形式を包括しており、明らかに廣範圍にすぎない。その説くところは、創作態度としての應酬についてであり、詩歌ジャンルとしての應酬ではない。筆者の理解によれば、應酬詩とはおおむね應對および謝意を表す際の作品を指すが、その中でも以下のようなものは包括すべきではない。

(1) 時と場所を同じくする唱和作品。杜甫「同李太守登歷下古城員外新亭」のようなものは、基本的には題を與えられて制作しており、應酬には數えられない。

(2) 職務として制作したもの。たとえば幕僚が主人主催の別宴の際に制作した送別詩や、大曆十才子の一連の作品のごときは、職務的なものであり當然のことながら應酬とはいえない。

(3) 職務としての制作に類するもの。すなわち文人の身分をもって宴に陪席した作品であり、杜甫「陪李金吾

花下飲」「陪諸貴公子丈八溝携妓納涼晚際遇雨二首」のごときものは、作者において往往にして切望するところの榮譽であった。このような場合、作詩は文人という身分の職務に近く、前者と同様に、これを應酬と稱しえない。

應酬の本質は、日常語の用法の示すところに似ており、つまりは心から願わずとも行わざるをえない型通りの挨拶である。普通、乗り氣でなくとも赴かざるを得ない宴會を「應酬」と呼ぶが、まさに應酬の本質に觸れている。他者の情誼にたいする眞の感激と感謝があれば、李白「贈汪倫」杜甫「贈衛八處士」のごとく、當然のことながら應酬とはいえない。これは朱庭珍の、以下のような考え方に近い。

勿論贈答唱和之作、但有深意有至情、卽是真詩、自應存以傳世、不得謂之應酬。卽投贈名公巨卿、或感其知、或頌其德、或紀其功、或述其義、但使言由衷發、

無溢美逾分之詞、則我係稱情而施、彼亦實足當之、有情有文、仍是眞詩。卽其人無功德可傳、而實能略分忘位、愛士憐才、于我果有深交厚誼、則知己之感、自有不容已于言者、意既眞摯、情自纏綿、本非違心之詞、亦是眞詩、均不得以應酬論。<sup>⑦</sup>

——贈答や唱和の作品であることに關わりなく、深い思いが有り、眞心が込められていれば、眞の詩であり、自ずから殘されて世に傳えられるわけであるから、これを應酬とは呼べない。名士高官に贈呈し、或いはその知遇に感激し、或いはその徳望を譽めたたえ、或いはその功績を記し、或いはその義氣を記述していても、言葉が心の奥底から生まれ、裝飾過剰な言葉がなければ、心情に合致した結果というわけであり、相手においても受けるに相應しく、心情を備えかつ文雅であり、やはり眞の詩である。つまりは、その人物には傳えるに足る事蹟がなくとも、自分の隔たりを忘れ、士を重んじて才能をいつくしみ、自分自身にとって深交厚誼があるならば、我が知己であるという感情は自然と言

葉に盡くしがたいだろう。思いが眞摯であり、心情が濃やかであれば、もとより心とは裏腹の言葉ではなく、それもまた眞の詩である。すべて一律に「應酬」として論じることはいできない。

正にこれ故に、古人の應酬に對する理解は往往にして、作者の交際對象との親疎および相應しい態度の差異に、密着したものである。率直に言つてしまえば、ある一首の詩が應酬であるか否かを判斷するのは、作者の感情が投入されている度合が、兩者の關係における親疎と比例をなすかどうかで決まるという見方である。

清代の詩論家である吳喬の述べたような「凡贈契友佳作移之泛交、卽應酬詩——親しい友に贈るような優れた詩作を、ひろく交際全般に及ぼしてゆくならば、それは應酬詩である。」<sup>⑧</sup>は、これは「言葉は往々にして感情を上まわる」という意味で缺點があるう。換言するならば、もし關係が昵懇な人なら、いい加減にしてはならぬことになり、假にいい加減な作品を書いたなら、それも應酬に入ること

になつてしまふ。韓愈「送李六協律歸荆南」の詩にいわく「早日羈遊所、春風送客歸。柳花還漠漠、江燕正飛飛。歌舞知誰在、賓僚遂使非。宋亭池水綠、莫忘蹋芳菲。——早日羈遊の所、春風客の歸るを送る。柳花還た漠漠たり、江燕正に飛飛たり。歌舞知んぬ誰か存る、賓僚使を逐ひて非なり。宋亭池水綠に、忘るなかれ芳菲を蹋むを」。

舊來の本には題下注として「翱」の字を附するものがあつたが、注釋家はみな等しく誤りとする。程學恂のそう述べた理由とはすなわち「此亦尋常泛應之作、不似與習之語。

——これもまた普通の社交のための作品であり、李習之に贈る言葉ではないだろう<sup>①</sup>」というものであつた。つまりは李翱のような關係親密な人に、韓愈はかくの如く浮薄にしてまるで應酬詩のような作品を書かないだろうというのだが、これは「言葉は必ずしも感情を盡くさぬ」という意味で缺點があろう。然るに問題は、この種の判断はあくまで後の解釋であり、作者と贈答相手の關係を知つていてこそ出せる結論ということである。もし兩者の關係が明白でなければ、情熱的あるいは平淡な作品を目的にしたとき、

どのようにその作品が言葉のうえでの過度な感情なのか、それとも其の心餘りて言葉足らずであるかを判別できるのか。筆者は特に、杜甫の作品への考察を通して、この問題を明らかなにしたいと思う。

## 二 杜甫の應酬詩

先人の説明に依據するならば、杜甫の詩集中に見られる「應酬」という詩題は題の文字通りであるが、だが實際のところ、應酬の性質を帯びた作品の數には限りがある。歴代の注釋家により天寶十五載（七五六）に編年される五言古詩「送率府程錄事」は比較的わかりやすい一首である。

鄙夫行衰謝、抱病昏妄集。常時往還人、記一不識十。  
 程侯晚相遇、與語才傑立。熏然耳目開、頗覺聰明入。  
 千載得鮑叔、未契有所及。意鐘老柏青、義動修蛇蟄。  
 若人可數見、慰我垂白泣。告別無淹晷、百憂復相襲。  
 內愧突不黔、庶羞以調給。素絲挈長魚、碧酒隨玉粒。  
 途窮見交態、世梗悲路澁。東風吹春水、決莽后土濕。

念君惜羽翮、既飽更思戢。莫作翻雲鶴、聞呼向禽急。

——鄙夫行く衰謝し、病を抱きて昏妄集る。常時往還の人、一を記して十を識らず。程侯 晩に相ひ遇ひ、與に語れば才 傑立す。熏然として耳目開き、頗る覺ゆ聰明の入るを。千載鮑叔を得、末契 及ぶ所あり。意は老柏の青きに鐘まり、義は修蛇の蟄するに動く。

若人數ば見る可くんば、我が垂白の泣を慰めん。別を告げて淹晷なく、百憂 復た相ひ襲ふ。内に愧づ 突の黔まざるを、庶羞 以て賜給す。素絲 長魚を挈げ、碧酒 玉粒に隨ふ。途窮まりて交態を見、世梗して路の澁せるを悲しむ。東風 春氷を吹き、泱莽として后土 濕ふ。念ふ君が羽翮を惜しむ、既に飽くも更に戢めんと 思はんことを。作す莫れ 雲に翻へるの鶴、呼ぶを聞きて禽に向ひて急なるを。

この詩の題下注には「程携酒饌、相就取別——程氏が酒と肴を攜え、訪ねて来てくれてお別れをした」とあり、これは作者の自注とは断定できないが、その折の出来事か

杜甫應酬詩小議（蔣）

なりの程度もの語るといえよう。詩は老眼の昏眊を嘆き、交友の機會も減つたことから説き起こし、程録事こそが晩年の境遇を慰めてくれる知音の友として感謝の意を表し、今やまさに遠別せんとする時、特に挨拶に訪れ、そのうえ作者杜甫の生活の窮狀を憐れみ、酒肴を携えて来てくれたために、杜甫を非常に感激させ、この詩が生まれたわけである。詩中の記述から觀るに、程氏は杜甫の晩年の困窮のなかでなおも交際が續いていた少數の知人の一人であり、詩のなかでは管鮑の交わりを以て兩者の關係を比すが、型通りにして過剰な褒め言葉を取り除けば、この詩の我々にあたえる印象は、あくまで程氏に酒肴を贈つてもらつたことに感謝して制作したものであり、送別の禮儀として相應しく、またこれは確實に杜甫としては重い意味での本當の援助であつたことである。

晩年に西南地方に漂泊して衣食にも事缺いたことにより「途窮まりて友生に仗る」<sup>⑬</sup>よりほかなく、杜甫の詩のなかには頗る多く、贈り物の答禮のために制作したものが殘されてゐる。前掲の詩と内容が似るものとしては「魏十四侍



御就敝廬相別」がある。

有客騎驄馬、江邊問草堂。遠尋留藥價、惜別到文場。

入幕旌旗動、歸軒錦繡香。時應念衰疾、書疏及滄浪。<sup>⑭</sup>

——客有り驄馬に騎し、江邊草堂を問ふ。遠く尋ね

て藥價を留め、別れを惜しみて文場に到る。幕に入れば旌旗動き、軒に歸れば錦綉香し。時に應に衰疾を念ひ、書疏滄浪に及ぶべし。

首聯においては驄馬の典故を引いて侍御の身分に合わせ、頷聯は魏氏が訪ねてきて別れるまでの情景を述べ、頸聯では魏氏がまさに幕僚となりまた歸省しようとすることを敘述し、最後に相忘るなかれという氣持ちで結びとしている。構成の工夫について言えば、すなわち典型的にして型通りの應酬作品であり、そして杜甫のこのように型通りなる所以は、魏氏が「遠く尋ねて藥價を留め、物を贈ってくれたからである。これゆえに杜甫は、二人の應對や閑談を誇張して「文場」<sup>⑮</sup>と呼ぶことさえ躊躇せず、魏侍御の風雅な

さまを特筆している。程録事や魏侍御のような官職にある人が、同じように檢校工部員外郎のような空名の肩書もちつつも人の家に居候する杜甫との交際を樂しむ所以は、作詩の名聲を尊ぶゆえに他ならず、ともに交際すれば自然と文化方面の品位も高められるからである。

このような内情を、杜甫がどうして知らぬことがあるうか。ゆえに答禮の詩には相手の希望するところの要素——道義なり詩文の出來榮えなり、時には風雅な性格なりを含ませるのである。たとえば「徐九少尹見過」にいわく「晚景孤村僻、行軍數騎來。交新徒有喜、禮厚愧無才。賞靜憐雲竹、忘歸步月臺。何當看花蕊、欲發照江梅。——晚景孤村僻に、行軍數騎來る。交りは新たにして徒に喜び有り、禮厚くして才無きを愧づ。靜かなるを賞して雲竹を憐み、歸るを忘れて月臺に歩む。何か當に花蕊を看るべき、發かんと欲す江を照すの梅」。少尹は、録事や侍御のような小官ではなく中級の地方官であり、詩中では相手の厚遇を稱贊している。また自分の菲才を謙遜するほかにも、重きを置いた表現といえるのは、徐少尹が少ない從者で訪問

してきた平易な態度や「賞靜憐雲竹、忘歸步月臺——靜かなるを賞して雲竹を憐み、歸るを忘れて月臺に歩む」のような閑雅な情緒であり、それらは讀者をして少尹は「松下喝道」のごとき俗吏にあらずと思わしめるが、これこそ正に、この徐氏なる人物が他人にあたえたいと欲する印象そのものではないか。その當時の人に對し、筆者は敢えて、徐少尹が杜甫の詩により不朽の名を求めようと願つたなどという想像は控えておくが。

さほど關係親密でない人に對し、杜甫はだいたい相手の地位や身分によつて詠み方を決めてゐる。では自分と關係がより近い人と交際する時には、杜甫はどのように應酬していたのだろうか。それは當然のことながら雙方の關係を踏まえながらも、同時にその間の世俗を超えた雰圍氣を特に描きだすという方法を用いてゐる。たとえば杜甫の「王錄事許修草堂不到聊小詒」の詩にいわく「爲嘖王錄事、不寄草堂賞。昨屬愁春雨、能忘欲漏時。——爲に嘖る王錄事、草堂の賞を寄せざるを。昨は春雨を愁ふるに屬するに、能く忘れんや漏れんと欲するの時を」。親しくもなく舊知の

間柄でもない人物に過ぎぬのに、詩の口ぶりは咎めるように要求しており、王錄事の杜甫に對する好意が月竝みではないとわかり、ここから兩者の關係における世俗を超えた色合いが顯著になる。反對に、親密な關係にある人になりたいしても「王十五司馬弟出郭相訪遺營草堂資」のごとく、詩はとても平淡に書かれてゐることもある。

客裏何遷次、江邊正寂寥。肯來尋一老、愁破是今朝。  
憂我營茅棟、携錢過野橋。他鄉唯表弟、還往莫辭勞。<sup>17)</sup>

——客裏 何ぞ遷次す、江邊 正に寂寥たればなり。肯て來たりて一老を尋ね、愁ひ破るるは是れ今朝。我が茅棟を營むを憂ひ、錢を携へて野橋を過る。他郷ただ表弟、還往 勞を辭する莫れ。

口語的な表現であり、首聯が領聯に對して對句ではない「偷春體」の構造も、みな作品の平易にして懇切なる風格を決定づけており、尾聯ではさらに親愛の情を述べて兩者の身分の隔たりをほやかかし、雙方の距離を近づけている。

清代の詩人である黃子雲の『野鴻詩的』<sup>⑮</sup>では次のように述べられる。

凡題贈、送別、祝慶、哀輓之題、無一非詩、人皆目爲酬應、不過拮據套語以塞責。試問有唐各家集中、此等題十有七八、而偏有拔萃絕群之什者何也？其法要如昌黎作文、尋題之間隙而入於中、自有至理存焉。<sup>⑯</sup>

——凡そ題贈・送別・慶賀・哀悼などを題とした作品は、すべてみな詩であるが、人はみな應酬と見なし、常套語をかき集めて間に合わせるに過ぎないとする。

だが、唐代の諸家の文集では、このような詩題が七八割を占めるが、まことに一頭地を抜く作品があるのは何故だろうか。その方法は要するに韓昌黎が文章を書くときに、常套的詩題の隙間を探して深く内面に入り込み、おのずと最高の道理が存在するようなものである。

杜甫の應酬詩は、その他のジャンルの作品と比較したと

きに群を抜いて突出したものとはいえないが、だが確として注目に値すべき名匠の心は、その中にも託されており、普通の型通りの應酬のなかにも平凡ならざる技巧が表われている。

### 三 杜甫の應酬詩の技巧

先人が應酬・贈答の作品を論じる際には、相手の身分にふさわしく體裁にかなった詠み方というものを強調した。李重華の『貞一齋詩說』の如きは、以下のように説く。

酬贈往復詩、須辨別儕類。至親不得用文飾、尊者不得用評論語、亦不得輕易用誇獎語。反此者失之。

——應酬や贈答の詩は、相手との關係をよく辨えるべきである。親族には文飾に満ちた言葉を用いるべきではなく、目上の人には批評がましい言葉を用いるべきではないし、且つまた安易に賞讃の言葉を用いるべきでもない。これに違反すれば、おかしいものになる<sup>⑰</sup>

杜甫の應酬詩における、最も突出した特徴としてはまず対象相手の身分に密着した意味での節度の取り方にある。同様に接待や訪問の作品は、相手の身分が異なることにより、杜甫の言葉づかいや語調にもそれ相應の區別がある。「賓至」一首は三人稱を以て書きあげた記録詩であるが、一方「客至」と「有客」は明らかに二人稱で相手述べた對話體であり、口語の雰圍氣を留め、同時に文體からみても微妙な差異がある。「客至」とは次のような詩である。

舍南舍北皆春水、但見群鷗日日來。花徑不曾緣客掃、蓬門今始爲君開。盤殮市遠無兼味、樽酒家貧只舊醅。肯與隣翁相對飲、隔籬呼取盡餘杯。

——舍南舍北皆な山水、但だ見る群鷗 日日に來たるを。花徑 曾て客に緣りて掃はず、蓬門 今始めて君が爲に開く。盤餐 市遠くして兼味無く、樽酒 家貧にして只だ舊醅。肯へて隣翁と相ひ對して飲まんとし、籬を隔てて呼び取り、餘杯を盡くさしむ。

詩の題下注にいわく「喜崔明府相過——崔明府のお越しになられたのを喜ぶ」とあり、人名は詩題にあらわれずに注のなかに收められ、題ではただ「客」と稱し、崔氏が思いがけずに訪れた新客であり、もとの友人でないことがわかる。<sup>23</sup> 首聯では侘住いであり、訪問客もないことを言い、頷聯では客が來た喜びを述べ、頸聯では市場が遠くて家計も貧しいために客の接待も満足にできない窮狀を率直に述べ、尾聯では農村風俗の純朴なるさまを描寫している。全編を通じて句法は口語に近く、對句は流水對を用い、前後の句どうしの脈絡はつながり、語氣は鄭重でありながら風趣を失わず、態度は瀟洒でありながら禮儀を失わぬところは、非常に體裁を得た應酬詩であるというべきである。清の黃生は次のように批評する。

前半見空谷足音之喜、後半見貧家眞率之趣。隔籬之隣翁、酒半可呼、是亦鷗鳥之類。而賓主之兩各忘機、亦可見矣。<sup>24</sup>

——前半には豫期せぬ喜びがあらわれ、後半には貧者

の飾らぬ雰圍氣があらわれている。垣根を隔てた隣のおじいさんを、お酒の途中で呼び込めるといふのも、隱者の友というわけである。主人も客のどちらも機心を忘れてゐるさまが目につかんでくる。

明らかに實景描寫の作品であるが、懇切にして嫌味のないう書き方のなかに生活感が溢れており、まことに非常に得難いものである。だが「有客」はそうではなく、その應酬の相手は明らかに別種の人物であり、故に詩もまた異なる味わいを描きだしている。

幽栖地僻經過少、老病人扶再拜難。豈有文章驚海內、  
漫勞車馬駐江干。竟日淹留佳客坐、百年粗糲腐儒餐。  
不嫌野外無供給、乘興還來看藥欄。<sup>⑤</sup>

——幽栖 地僻にして經過少なり、老病人は扶けて再拜難し。豈有らんや文章の海内を驚かすを、漫に勞す車馬の江干に駐まるを。竟日淹留して佳客坐し、百年粗糲腐儒餐す。野外供給無きを嫌はずんば、

興に乗じて還た來たりて藥欄を看よ。

この詩の「客」は明らかに身分のある人であり、詩中に用いるところの語法もまた明らかに尊敬の意を加えたものである。だが清代の詩論家である邊連實の説くが如く、その來客は明らかに「應非箇中人、而借援于聲氣——その場に相應しい人ではなく、威勢に任せる」<sup>⑥</sup>ような俗客であり、そのために語調のなかに敬遠の雰圍氣を帯びるのを免れなかつた。首聯の對句は杜甫においては手慣れた方法であるが、ここでは文體の莊嚴なる色合いを強める作用を引きだしている。そして「幽栖」「地僻」「再拜」「豈有」「粗糲」「腐儒」「野外」「供給」「藥欄」などの謙讓語に屬するものと「漫勞」「車馬」「淹留」「佳客」などの敬語とを對照させると、更にはつきりと雙方における地位の格差が浮き彫りになり、表向きは相手に敬意を表し、自分を貶めているが、裏側では相手に敬意を表するという行爲を借用して自分こそを際立たせており、黃生の謂うところの「語雖自謙、中實有自喜——言葉は謙遜しているが、内心じつは自

己満足している」の如くである。これすなわち先人の説くところの自己の立場を守ための行爲であり、尊嚴を失わぬための表現手段である。

應酬とは本質的には創作意欲に關わりなく制作されるものであり、進んで力を盡くそうと願う人はそう多くなく、手抜きできる限りは手抜きしようとするものである。ゆえに應酬とは普通は最もいいかげんに濟まされ、最も模倣や剽竊に墮ししやすいジャンルである。清初の毛際可「陳山堂詩序」は、當時の論者の「古有詩而今則無詩——昔は詩があつたが、今は詩がない」という憤懣に満ちた言葉をさらさら敷衍して述べている。

非無詩也、僞也。其病一在於模擬、一在於應酬。模倣者、取昔人之體貌以爲詩、而已不與。應酬者、取他人之爵服名譽以爲詩、而已不與。

——詩がないわけではない。「僞」ゆえに問題があるのだ。その弊害は、ひとつは模擬に存在し、いまひとつは應酬に存在する。模倣するひとは、古人の作品の

外形を借りて詩を作るが、けつきよく自分とは關わりがない。應酬するひとは、他人の官職や名聲を借りて詩を作るが、けつきよく自分とは關わりがない。

そこに自己が投入されていないために自己の性情には關わりなく、すなわち葉燮の謂うところの「客料生活」となる。葉燮「原詩」「外篇」には次のようにある。

應酬詩有時亦不得不作。雖是客料生活、然須見是我去應酬他、不是人人可將去應酬他者、如此便於客中見主、不失自家體段、自然有性有情、非幕下客及捉刀人所得代爲也。每見時人一部集中、應酬居什九有餘、他作居什一不足。以題張集、以詩張題、而我喪我久矣。不知是其人之詩乎？抑他人之詩乎？若懲噎而廢食、盡去應酬詩不作、而卒不可去也。須知題是應酬、詩自我作、思過半矣。

——應酬詩は時として作らざるをえない。たとえ食客として給料をもらう生活であつても、自分からそ

の相手に應酬するのであり、決して人がみなその相手に應酬するわけではないと思うべきである。そうすれば食客として主人に會つても、自己の對面を失わず、自然に人間性もあり、人情もあり、幕客や文筆家などの代作しうるものではない。今の人人の文集一冊を見るとかならず應酬作品は九割に餘り、その他の作品は、一割にも満たない。詩題によつて文集を飾りたて、詩によつて詩題を飾りたて、そこに自分というものを見失つてしまふのだ。その人の詩といふべきか、他人の詩といふべきかわからない。もし噓ぶに懲りて食を廢するが如く、應酬詩をやめて作らないようにしても、到底やめることはできない。詩題は應酬であつても、詩はあくまで自發的に作るものであるのを知るべきであり、(そうすれば)得るところは多いであらう。<sup>⑧</sup>

これはつまり應酬詩とは本質的に情感に缺けたものである故に、とりわけその主體性を確立させることが必要であり、さまなければ必然的に人情が表現されず、中身の空虚

なものになりやすいと説く。程學恂が韓愈の「奉酬振武胡十二丈大夫」の詩を批評していわく「雖亦尋常酬應之作、然中有自見處、言外無限感慨——これもまた普通の應酬作品であるが、その内部には自然と浮かび上がるものがあり、言外には無限の感慨がただよう」とは、まさしくこの事を強調している。杜甫のような落ちぶれ名士における應酬の際の主體性とは、とりわけ自己の立場を守ることであり、身分を失わず、みすばらしくないようにするものであつた。杜甫には「太子張舍人遺織成褥段」という詩があるが、これは張舍人が翡翠織りの寢具を贈ってくれたのに感謝する作品であり、以下の通りである。

客從西北來、遺我翠織成。開緘風濤湧、中有掉尾鯨。  
 逶迤羅水族、瑣細不足名。客云充君褥、承君終宴榮。  
 空堂魑魅走、高枕形神清。領客珍重意、顧我非公卿。  
 留之懼不祥、施之混柴荆。服飾定尊卑、大哉萬古程。  
 今我一賤老、短褐更無營。煌煌珠宮物、寢處禱所嬰。  
 嘆息當路子、幹戈尚縱橫。掌握有權柄、衣馬自肥輕。

李鼎死岐陽、實以驕貴盈。來瑱賜自盡、氣豪直阻兵。  
皆聞黃金多、坐見悔吝生。奈何田捨翁、受此厚賜情。  
錦鯨卷還客、始覺心和平。振我粗席塵、愧客茹藜羹。

——客 西北より來り、我に遺る翠織成。緘を開けば  
風濤涌き、中に尾を掉ふの鯨あり。逶迤として水族を  
羅ね、瑣細名づくるに足らず。客云く「君の褥に充  
て、君が終宴の榮を承けしめよ。空堂魍魎走り、高  
枕形神清し。客の珍重の意を領するも、我が公卿に  
非ざるを顧みる。之を留むれば不祥を懼れ、之を施さ  
ば柴荆に混ず。服飾尊卑を定め、大なる哉 萬古の程。  
いま我一賤老、短褐更に營み無し。煌煌たり 珠宮  
の物、寢處すれば禍の嬰る所なり。嘆息す 當路の子、  
干戈尙ほ縱横なるを。掌握權柄あり、衣馬自ずか  
ら肥輕。李鼎 岐陽に死するは、實に驕貴の盈つるを  
以つてす。來瑱 自盡を賜ふは、氣豪にして直に兵を  
阻めばなり。皆な聞く黃金多しと、坐ろに見る悔吝の  
生ずるを。奈何ぞ 田舎の翁、此の厚賜の情を受けん  
や。錦鯨 卷きて客に還し、始めて覺ゆ 心の和平なる

を。我が粗席の塵を振るひ、愧づらくは客に藜羹を茹  
らはしむるを。

浦起龍の考えでは「題中無答、謝、却等字、此亦事後感  
賦、自存篋衍耳、非以與張也——詩題には『答』『謝』  
『却』などの字は無く、これもまた後になって感激を詩に  
詠み、篋底に留め置いただけであり、張氏に贈ったわけ  
はない」とあり、その解釋に従うならば、この詩は應酬詩  
に數えることはできず、ただの感興詩になる。然しながら  
その判斷には明らかに問題がある。詩の末尾には明らかに  
「翠褥」を客に返却し、その後で客を款待して食事を用意  
しており、その折の謝絶のための作品とすべきである。詩  
はきれいに四段に分かれ、最初の十句は張舍人の贈與する  
ところの「翠褥」が名高く貴重であることを書き、次の段  
の十句ではこのような名高く貴重な寢具は、己のごとく老  
いて賤しき者の用いるべきものに非ざることを説き、三段  
目の十句では安史の亂以後における奢侈により禍を招いた  
人物という謂わば「前車の戒め」を列舉し、最後の段では



頗る婉曲に贈り物を謝絶しており、己の清貧に甘んじる心を披歴している。もし他の人物ならば、漂泊生活の困窮のなかでこのように華美なる翠褥を手に入れたならば、すぐさま喜びに躍りあがり、くどくどと禮を述べるに違いない。だが杜甫はそうではなく、此のごとく華美なる寢具は、自分の清貧なる家庭状況には相應しくないと感じ、そこでなるべく柔らかに張舎人の氣前よい贈り物を謝絶し、ついでに奢侈は禍を招くという戒めの氣持ちを吐露している。錢謙益の見るところでは、詩中に李鼎<sup>⑤</sup>・來瑱<sup>⑥</sup>を例として擧げているのは、嚴武の贅澤三昧を諷刺する意味を籠めてあるというが、筆者はそれは私人間のやり取りの作品であるという本来の意味合いに必ずしも適合しないと感ずる。この詩におけるこの工夫は、杜甫自身における、君子もとより窮すと雖も、規矩を正しく踏みおこなう儒者としての品格を體現する以外に、また士大夫の落魄の際における自尊心を表現している。これは應酬において自己の立場を守ることであり、僅かに餘すところの尊嚴の喪失を免れるわけである。

#### 四 杜甫の應酬詩の後世への影響

まさに前文に提起せるが如く、應酬の詩歌作品の形式としての確立は、さまで早いことではない。それは文人という身分の獨立と密接に關係するものである。文人という身分の獨立は、文學がある一人の人物の生計の具となるうとしているのを意味し、文學の創造はその後においては生活のためという世俗的要求と結びつき、時がたつにつれ、やがては避けがたい社交的需要のほうに主導權を握られるのである。

建安以來の詩歌史をふりかえれば、李白と杜甫の二人の大詩人はまさに文人という身分の獨立のための先驅者と認めざるを得ない。そして文人が一旦、文學を以て生計を立てれば、つまらぬ應酬に直面せざるを得ぬのである。李白と杜甫以前、詩歌創作の動機として主要なものは二つの形式が存在し、一つは自發的な感情による作品であり、もう一つは命令を奉じてその場面に合わせて制作した作品である。李白と杜甫の詩に到り、はじめて禮容を備えた應酬の

作品が加えられたわけである。これと同時代人の「慷慨言志」「詠史懷古」「寫景詠物」「酬贈干謁」などのジャンルの作詩方法には各各に顯著なる違いがあり、それは時がたつにつれ、後世の詩歌創作における主流のジャンルとなった。

杜甫の晩年の境遇は、秦・蜀の地を流浪しながら他人の家に寄寓するという特殊なものであり、自身をして應酬詩における最も重要な作家たらしめたが、その應酬する雙方の關係の把握や、またあくまでも節度ある感覺を保つこと、そして主體性の確立などの方面において後世の人のために典範を樹立した。その後、大暦年間の詩人は送別詩をおもな應酬とし、宋人は次韻詩をおもな應酬とし、明人は祝賀詩をおもな應酬とし、鬱然として一代の文風をなした。清初に到り、應酬詩は明詩の墮落における顯著なる症状とまで目された。吳喬はこう述べる。

詩壞於明、明詩又壞於應酬。朋友爲五倫之一、既爲詩人、安可無贈言？而交道古今不同、古人朋友不多、

杜甫應酬詩小議（蔣）

情誼眞摯、世愈下則交愈泛、詩亦因此而流失焉。『三百篇』中、如仲山甫者不再見。蘇・李別詩、未必是眞。唐人贈詩已多、明朝之詩、惟此爲事。唐人專心於詩、故應酬之外、自有好詩。明人之詩、乃時文之尸居餘氣、專爲應酬而學詩、學成亦不過爲人事之用、舍二李何適矣。

——詩は明代において崩壊し、明代の詩は應酬によつて崩壊したといえる。朋友の交わりは五倫のひとつであり、詩人であるのなら、言葉を贈るのは當然のことであろう。しかし交友の道は、昔と今とは相異なる。古人は朋友が少なく、その情誼は眞摯であつた。時代が下れば下るほど交際は廣く淺いものとなり、詩もまたこのために形骸化した。『詩經』の三百篇のなかで、仲山甫のような人物はまたと得難い。蘇武と李陵との別れの詩は、眞僞に問題がある。唐代の人であつても贈答の詩は多いが、明代の詩は、そこだけに集中している。唐代の人は詩に専念したので、應酬以外にも自ずから良い詩ができた。明代の人の詩は、つまりは八

股文のさらに氣息奄奄としたようなものであり、もっぱら應酬のために詩を學んだために、たとえ習得したとしても社交の道具に過ぎず、『二李』のやり方を全く離れられない。

二李とはすなわち「前後七子」の代表者たる李夢陽・李攀龍であり、まさしく杜甫を専門に學んだ詩人であり、その應酬の技術も杜甫に遡るものと擇えることもできよう。

杜甫が詩歌史に及ぼした影響の深大なることは、まさにこの處に存するわけであり、ただ單に古詩の形式が勢いに富み、律詩の格調が巧みにして典雅であり、また絶句の面目を一新せしめたことなどが後人のために典範を樹立せるのみならず、さらに應酬作品のような、王夫之に「詩備」と目されたような小さなものまでも、後世の創作活動にたいして絶大なる影響を與えている。このような意義に就いて見れば、葉燮がその詩歌史の様相を改めた能力に着眼し、杜甫と韓愈と蘇軾とをともに古今三大家として推したのも、所以なしとはしない。

註

① 「譯者注」この箇所の本文のテキストは仇兆鰲『杜詩詳註』附編（中華書局本、第五冊二三五頁）によるものと思われ、姚鉉『唐文粹』（四部叢刊本）や『元氏長慶集』（四部叢刊本）などとは文字の異同がある。

② ・陳師道『後山詩話』第十條、「蘇子瞻云：子美之詩、退之之文、魯公之書、皆集大成者也。」

・秦觀『淮海集』卷二十二「韓愈論」、「杜子美之於詩、實積衆家之長、適當其時而已。昔蘇武、李陵之詩長於高妙、曹植、劉公幹之詩長於豪逸、陶潛、阮籍之詩長於沖淡、謝靈運、鮑照之詩長於峻潔、徐陵、庾信之詩長於藻麗、於是杜子美者窮高妙之格、極豪逸之氣、包沖淡之趣、兼峻潔之姿、備藻麗之態、而諸家之作所不及焉。然不集諸家之長、杜氏亦不能獨至於斯也。豈非適當其時故耶？孟子曰：『伯夷、聖之清者也。伊尹、聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子、聖之時者也。孔子之謂集大成。』嗚呼、杜氏韓氏、亦集詩文之大成者歟。」

・嚴羽『滄浪詩話』「詩法」、「少陵詩、憲章漢・魏、而取材於六朝、至其自得之妙、則前輩所謂集大成者也。」

③ 錢謙益『初學集』卷三十二、上海古籍出版社一九八五年版、中冊第九二八—九二九頁

④ 程千帆『杜詩集大成說』、『古詩考索』、上海古籍出版社一九八四年版、第三三頁。

- ⑤ 「譯者注」朱庭珍（一八四一—一九〇三）字は小園・筱園、雲南石屏縣の人。光緒十四年の舉人、經正精舍の主講となった。著書に『筱園詩話』四卷・『穆清堂詩鈔』三卷・『續集』二卷などがある。
- ⑥ 張國慶編『雲南古代詩文論著輯要』、中華書局二〇〇一年版、第三二二頁。
- ⑦ 張國慶編『雲南古代詩文論著輯要』、第三二〇—三二二頁。
- ⑧ 「譯者注」吳喬（一六一—一六九五）、もとの名は爰、字は修齡、江南太倉の人。著書に『圍爐詩話』六卷・『古宮詩』・『托物草』・『好山詩』・『舒拂集』などがある。
- ⑨ 吳喬『圍爐詩話』卷四、郭紹虞輯『清詩話續編』、上海古籍出版社一九八三年版、第一冊第五九八頁。
- ⑩ 「譯者注」程學恂（一八七三—一九五〇）字は公魯、號は伯臧、江西新建縣の人。「韓詩臆說」の著があり、韓愈の詩に注解を加えている。
- ⑪ 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』卷八、上海古籍出版社一九九四年版、下冊第九三六頁。
- ⑫ 浦起龍『讀杜心解』、中華書局一九六一年版、第一冊第二四—二五頁。
- ⑬ 「譯者注」杜甫「客夜」、「計拙無衣食、途窮仗友生」。
- ⑭ 浦起龍『讀杜心解』、第一冊第二四—二五頁。
- ⑮ 「惜別到文場、仇兆鰲『杜詩詳注』作「倒」、校一作到。
- ⑯ 「譯者注」「松下喝道」李商隱『雜纂』、「殺風景……清泉濯

杜甫應酬詩小議（蔣）

- 足、花上曬禪、背山起樓、燒琴煮鶴、對花啜茶、松下喝道」。
- ⑰ 浦起龍『讀杜心解』、第二冊第四〇四頁。
- ⑱ 「譯者注」黃子雲（一六九一—一七五四）、字は士龍、號は野鴻、江蘇昆山の人。著書に『野鴻詩的』一卷・『四書質疑』・『詩經評勘』・『野鴻詩稿』・『長吟閣詩集』などがある。
- ⑲ 丁福保輯『清詩話』、上海古籍出版社一九七八年版、下冊第八五五頁。
- ⑳ 「譯者注」李重華（一六八二—一七五五）、字は實君、號は玉洲、江蘇吳江の人。雍正二年の進士。著書に『貞一齋集』・『詩說』二卷・『三經附義』六卷などがある。
- ㉑ 丁福保輯『清詩話』、下冊第九三二頁。
- ㉒ 浦起龍『讀杜心解』、第三冊第六二〇頁。
- ㉓ 金聖嘆『杜詩解』卷四、「薛廣文云、按公生母崔氏、明府其舅氏也。今看去、恐不是尊行、必是表兄弟。題曰客至、是又遠分者。待他之法、客又不純是客、親又不純是親、故知其為遠分表兄弟也」。上海古籍出版社一九八四年版、第二五三頁。
- ㉔ 黃生『杜詩說』卷八、黃山書社一九九五年版、第三一六頁。
- ㉕ 浦起龍『讀杜心解』、第三冊第六二六頁。
- ㉖ この詩題は、蔡夢弼『草堂詩箋』本では「賓至」に作る。
- ㉗ 邊連寶『杜律啓蒙』七言卷一、齊魯書社二〇〇五年版、第三八四頁。
- ㉘ 「譯者注」黃生（一六三一—？）、字は扶孟、號は白山、安

徵歛縣の人。小學に詳しく、明の諸生であり、清には仕えなかつた。著書に『字詁』・『義府』・『黃生文稿』・『三禮會編』・『三傳會篇』・『載酒園詩話評』・『唐詩摘鈔』・『杜工部詩說』・『一木堂詩稿』などがある。

②9 黃生『杜詩說』卷九、第三五一頁。

③0 毛際可『會侯先生文鈔』卷八、康熙刊本。

③1 葉燮『已畦文集』附、康熙刊本。

③2 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』卷八、下冊第九三六頁。

③3 浦起龍『讀杜心解』、第一冊第一一六頁。

③4 浦起龍『讀杜心解』、第一冊第一一七頁。

③5 「譯者注」李鼎については安史の亂の平定において功績があつたことが『舊唐書』卷十「肅宗本紀」に散見されるが、上元二年六月に鄆州刺史・隴右節度使に任ぜられたのを最後に、記述が途絶える。杜甫の詩にいう「岐陽に死す」については不詳。

③6 「譯者注」來瑱（？—七六二）については『舊唐書』卷百十四に傳がある。安史の亂の平定に功績があつたが、讒言により敵との内通を疑われ、死を賜う。

③6 錢謙益『錢注杜詩』卷五「箋」、「史稱嚴武累年在蜀、肆志逞欲、恣行猛政、窮極奢靡、賞賜無度。公在武幕下、此詩特借以諷諭、朋友責善之道也。不然、辭一織成之遺、而侈談殺身自盡之禍、不疾而呻、豈詩人之義乎」。上海古籍出版社一九七九年版、上冊第一六五頁。

③7 「譯者注」王夫之『薑齋詩話』卷二、「詩備者、衰腐廣文、應上官之徵索。望門幕客、受主人之僱託也」。

③8 「譯者注」葉燮『原詩』卷三、「杜甫之詩、獨冠今古、此外上下千餘年、作者代有。惟韓愈・蘇軾、其才力能與甫抗衡、鼎立爲三」。